

明恵上人の名字本尊について

藤 島 達 朗

一

明恵上人の高弟喜海の編述にかかる「明恵上人行状」下巻に、次の如き記事がある。

建保二年甲戌ノ比、花嚴經十、廻向品ノ中ニ、菩薩五臓ノ中ノ心ノ臓ヲサキテ衆生ニ施與スルトキ、廿種ノ菩提心ヲ列タリ、其中ノ四種ノ菩提心ヲ左右ニ書テ能求ノ心トシ、中ニ三種三宝ノ名字ヲ置テ所求トシテ、上ニ横ニ三宝ノ梵号コレヲ書シテ本尊トス、必生々世々普賢大菩提心ノ行者トシテ、三宝ノ値遇ヲトゲムガタメナリ、委細ハ三宝礼釈并功德義等コレヲミルヘシ、(和歌山県施無畏寺本による)

即ち建保二年(一二二四)の頃、時に上人は四十二才で

あるが、中央に三種(同相・別相・住持)の三宝(仏・法・僧)の名字をおき、左右に華嚴經卷十廻向品(八十華嚴第廿七)にてあかす廿種の菩提心中の四種をつらね、上部に横に三宝の梵字を書いて以って本尊とした。そしてその詳細は「三宝礼釈」並びに「同功德義」にてこれをみよというのである。「三宝礼釈」「同功德義」は、正しくは「三時三宝礼釈」一卷、「自行三時礼功德義」一卷で、実は前者は翌三年十一月廿五日、後者は、同四年十月五日に、それぞれ撰成されている。なおこの本尊は、当時のものが、現に洛西梅尾高山寺に二幅伝えられている。

梵	万相莊嚴金剛界心	大勇猛幢智慧藏心
号	南無同相別相住持弘法僧三宝	如那羅延堅固幢心
	如衆生海不可尽心	如衆生海不可尽心
	台蓮	

二

以下、「三宝礼釈」によって、その意図するところをうかがうと、次の如くである。

先ず劈頭に

愚僧練若台ノ草庵ノ学文処ニ三宝菩提心ノ名字ヲカケ奉リテ、三時念誦ノ次デゴトニ、出堂ノ後必ズコノ名字ヲ唱テ、毎度三返ノ礼拝ヲ致ス、合ヒテ三時ニ九返ノ礼拝也(日本大藏經本による。以下同じ)

という。練若台については、同じく上人の直弟高信編するところの「高山寺縁起」によると、建保三年(一二二五)の夏の頃、人が多いので喧騒をさけ、山内西の峯に三間一面の草庵を構えて、これを練若台と号し、専ら行法・坐禅・誦經・学問の場所とされた。「三宝礼釈」「同功德義」等も、ここで述作されたのであるといっている。ここに右の本尊を懸け、一時に三返、三時で都合九返の礼拝をする

というのであるが、その礼拝の仕方については、

合掌シテ直ニ立テ唱テ云ク、南無同相別相住持弘法僧三宝、生々世々値遇頂戴、万相莊嚴金剛界心、大勇猛幢智慧藏心、如那羅延堅固幢心ト云フ迄ハ立テ、此下ノ句ノ如衆生海ト誦シ始ルト等ク身ヲ地ニ投テ礼スレバ、生々世々皆悉具足ト云フト等ク礼シハツル也

と述べる。併しこれは自分がしていることで、すべてこのようにせよというわけではないと断わっている。

さて本論に入つて、先ずこれは何物であるか、

何故にかかることをするのかと設問する。即ち中央の一行は三宝の名字であり、左右の二行は菩提心の名字、上部の梵字は三宝の梵号であるといい、次いでとかく仏像にむかつては、周偏の体を見ることができないで、なんとなくかたよりせまくなる。即ち三宝を総礼すれば、広大な仏事をなす心持となる。又妄心はとどめがたく、菩提心はくもりがちである。華嚴經によれば、諸菩薩が自らの五臓中の心の臓をさいて、甘種の菩提心を得せしめようとする。それは諸菩薩が命にかえて衆生に授けんと願う菩提心の名字であるから、これを誦し礼し奉れば、身の毛いよだち心いさむ、即ち渴仰の至りに、その名字を書いて本尊とするのであると述べ、その文字による本尊の正当性については、も

とも聖教の文字は、如来海印三昧の所現であり、仏地の後得智より出でる。これによって密教では、名字を真言とし、これを観じて実際に至るとする。そしてその典拠を、三宝礼については「起信論大意記」に、菩提心礼については「法界無差別論」「菩提心離相論」「菩提資糧論」等に、もめている。

次に三種の三宝並びに四菩提心の義理を積するが、もとも四菩提心も実に三宝の外ではない、しばらく能所に分つて帰命するのであるといい、廿菩提心中より四心をえらびとつたのは、それぞれそれが如来の四智に配当されるからであり、万相莊嚴心は大円鏡智に、大勇猛心は平等智性に、如那羅延心は妙觀察智に、如衆生海心は成所作智に順ずる。即ちこの四心が成就すれば、四智となるのであり、従つて中央の三宝は自ら法界体性智となるとする。では何故四智を拝せず因の四心を礼するのかといえば、三日月と満月の例をひき、やがて満月となる初分の三日月、それは功を励ますはじめであり、無明のかこいの中に、はじめて勝心をおこすのを礼するのであるという。なおこの四心を「功德義」では、更に次第の如く普(万相莊嚴心)賢(大勇猛心)行(如那羅延心)願(如衆生海心)にあて、従つてこれを称礼することは、普賢の十大願を行ずると同価値

になると述べている。

又西方の行者の立場から、生々世々値遇三宝といえ、それは生死流転の間の行で、順次の往生極樂の行ではないではないかとの問を發し、それに答えて、極樂に往生して三宝に値遇し、菩提心を成就して、三身の仏果を円満せんが為である。故に三宝に値遇し、菩提心をおこそうと願わば、往生を求める人のためには即ち往生の業であり、念仏を好む人のためには又意業の念仏である。即ちそれは同じことであつて、もし心にかかるならば「南無三宝順次決定往生極樂」といって差支えないという。

更に在家のもの浄不浄をきらわずこれに礼供してよろしいかというのに対し、朝夕口をすすぎ、手を清めてすることがのぞましい。すればたとえ余行をせずとも、この一行で二利は円満する。財なく図絵の仏像のもうけられぬもの、この名字にむかつて一仏一菩薩を念ずれば、もれることはない。がこれをかけるところのないようなものは、かけずとも口にのみ唱えて礼すれば足りる。又自分は三時にするが、必ずしも三時にせねばならぬことはない。一日に三返でもよく、ただ名字だけ唱えてもよく、或は香花を供え、或は飲飯のついでに供養するがよい。そして衣服、食事等、栗柿の一つでも、まずこれに供えて然るのち用うる

ことを心がくべし、とかく在家のものは、世務にまぎれて怠たりがちとなるであらうが、はじめ怠るとも、功をつめば性となる。これほどのことをせずして、どうして解脱を期することが出来よう。とにかく在家の男子女人は「南無三宝後生タスケ給へ」でよろしいし、又「南無三宝菩提心、現当二世所願円満」とも、ひとえに心にまかせ、かたぐるしく定式を、もうける必要はないことであると述べて、「札釈」を終えている。

三

「功德義」では、まずさきにふれた如く、四心を普賢行願に配して、その価値を称揚し、次いでそのような意義深い行は、智慧あってその義理を解し行じてこそ価値があるので、そうでないものには、何の勝利もないではないかというに對し、断惡証理の道は、智慧なくしてはかなわぬが、滅罪生善の徳は、それとは関係なく、ただ信ずれば足りる。いわんやこの礼拝は普賢十願の修行である。普賢十願は一切仏法の根本である。即ちそれこそ智慧である。そして深くその功德を信ずる、即ち信である。信慧そなわって、ここに入道の資糧具足するのであるという。そして西方の行者の場合を再びとりあげ、「普賢行願經」によつ

て、その往生極樂をのべ、その所説の功德利益を、「觀經」の九品往生に准ぜば、上品上生の業にあたるとなし、これを圭山大師の「行願經」の読誦往生の釈によつて強調する。そして礼拝の一行で勝利を得る証拠を、「彌勒本願經」によつて述べ、最後に

然レハ此一行ヲ以テ所作トセント思ハ、晝夜ニ二時三時トモシメテ信心決定シテ此行ヲナサハ、タトヒ余ノ行業ナクトモ足リヌヘシ、況ヤ礼仏ノ業ハ、我慢障ヲ除テ尊貴ノ報ヲ得トイヘリ、其尊貴ノ報ト云ハ、近クハ刹利巨富長者、大婆羅門家、遠クハ無上大賢ノ位ナリ、成仏ノ妙道是ニ足リヌヘシ、況ヤ余事ヲヤ、宜ク此意ヲ得テ、身ノ淨キ穢キラエラバス、但手ヲス、ギ、口ヲ洗ヒ、専ラ礼敬ノ功ヲ積ヘシ、余ノ義ハ礼釈ノ中ニ説クカ如シと述べて筆をおさめている。

四

以上、両書によつて、上人の名字本尊の実体とその意図を明かにしたのであるが、上人は、これを一応自行であるといっている。併しさに述べる如く、明かに在家を対象としている。そしてこれを書いて諸人に施与している。喜海の「行狀」に、上人の夢を述べて次の如くいう。上人が

ある世界に往生した。その世界の衆生は、すべて七宝莊嚴の瓔珞でもってその身を莊嚴している。その瓔珞をよくよくみれば、自分が前生にて書き与えた三宝本尊である。するとこの国の衆生は、前生でそれを持ち奉ったから、このようにすがすがしいのであると思うと夢がさめた。凡そこの三宝本尊を持して皈向信順する人々が、不思議の勝利を得、或は夢想を感じ、或は除病延寿等の利益にあずかるなど、見聞するところは、一、二にとどまらず、詳しく述べることは出来ない。もともと「功德義」の執筆自体、実は藏人大夫藤原孝道が、これを持し修して夢相を語ったことに由来している。高山寺に藏する上人自筆消息の断簡には、

かしこまりてうけたまはり候ぬ、三ぼう十五枚まいらせ候

の語句がみえる。これら併せて上人がこれを書いて盛んに人々に与えたことを知らしめられる。もともと華嚴宗にあつて、いわゆる東大寺華嚴に比し、高山寺華嚴の実行性、実践性がとねえられる。まこと上人の「唯心観行式」(建久九 廿六才)にはじまり「光明真言句義釈」(貞応元、五〇才)、「光明真言土砂勸信記」(安貞二、五六才)に及ぶいわゆる厳密の実践性は頗る顯著であり、そしてそれはこ

の「三宝礼」にて極まるという得よう。

新仏教の民衆性は当然ながら、学解と行持に終始すべき旧仏教諸宗のこの時代のすがた、特に法相宗に於ける解脱上人の釈迦念仏の提唱、律宗に於ける叡尊・良観の文殊行の実践、そしてこの明恵上人の三宝礼の勧奨等、それらに我々はなだれる時代の大きなひびきを聞くのである。

五

鎌倉仏教の特色は、在家仏教の成立にあり、そしてその根源は、法然上人の専修念仏の提唱にあるといわれる。正しくさきの如く三宝礼をたずねて、その影響に直に気付く。法然上人の「選択集」が印行せられたのは、建暦二年(一二二二)九月のこと、そして右の如く三宝本尊の創始は、建保二年(一二二四)である。周知の如く明恵上人が「選択集」を難破をして、「摧邪輪」三巻を著したのは、建暦二年十一月であり、「摧邪輪莊嚴記」一巻は同三年六月である。両者に於いて難ずるところは

一 撓_ニ去_ニ菩提心_一過失

二 以_ニ聖道門_一譬_ニ群賊_一過失

であるが、実はその大部分、もっとも力をいたすのは、前者である。思うてここに至れば、三宝菩提心を高く掲げ

ずにいられぬ上人の立場は明かであらう。

併し三宝名字本尊の成立は、法然上人の影響といえるが、名字を以て本尊とすること、そのこと自体はそうとはいえない。法然上人にその形跡はなく、それはその弟子親鸞聖人に於いてはじめて見出されるが、併し聖人に於けるいわゆる名号本尊の存在は、現在のところ、その遺物による限りその晩年、八十才以後である。奇しくも明恵上人と親鸞聖人は同年生れである。三宝本尊の成立した建保二年は、配所越後を出発して関東に入った親鸞聖人が、上野国佐貫についたばかりの時である。名号本尊の成立を、その前後に考えることは、状況として認め得ない。むしろいかなれば、明恵上人の名字本尊の影響を、名号本尊の上に見るべきであらう。そしてそれは更に日蓮聖人の経題本尊、一遍上人の名号本尊とつながってゆくことを指摘出来るようである。

すれば明恵上人の名字本尊は、何処にその根拠をおくかが問題となる。一代仏教の本尊論をここに展開する余裕はないが、文字を以て明かに本尊となしたのは、やはり上人に始まるとせねばならないのであらう。ただ密教に於いては、諸仏の種子を拝する。それを合して種子曼陀羅が成立している。さきに文字による本尊の正当性を述べるところ

でふれたが、「三宝礼釈」に於て

先ヅ文字ニ書テ本尊トスル事ハ、聖教ノ文字ハ、或ハ如来海印三昧ノ所現、或ハ仏地ノ後得智ヨリ出タリ、凡ソ三藏ノ文ヲ述テ四印ノ義ヲツラヌケバ、随方ノ文字ヲ以テ一大藏ノ契経トス、コレニヨリテ密教ニハ或ハ名字ヲ以テ真言トシ、或ハコレヲ観ジテ實際ニイタル也

というてゐる。四心を四方に配して四智にあて、中央に法界体性智の意味に於て三宝を置いたこの構相は、厳密の行者たる上人に於て、はじめて可能であつたと考えられるのである。

(一九六八・五・一〇)

註

① 大橋俊雄「法然上人並に其門流の本尊観について」(顕真学苑論集五〇)

② 禿氏祐祥「本尊としての仏名と経題」(日本仏教学協会年報第三年)

③ 恵信尼消息第五通